

◆この小説を読むに当たつての注意

・この小説はまだ執筆中のものです。まだシナリオや設定、語りにおかしな所があるかもしれません。また、執筆が完了するより早く不完全な状態のまま公開するものという意味でこれをBetaと名付けていますが、実際に世間で使われているこの言葉の用法とはこれは異なるかもしれません。

・文字は縦書きとして組んであります。このファイルは横長のページになっている紙印刷用のファイルです。ソフトで自動的にレイアウトしてあり、組版は手作業で吟味して行つてはいません。よつて、紙の大きさ、形はページ形式にはまともっていません。

・この物語はフィクションです。文中に出てくる組織名・人物名などは実在のものではありません。また、この物語はエンターテイメント性を重視して書かれています。この物語中に出てくる主義・主張は一切実際の作者の主義とは関わりありません。

・この小説の著作権はすべてwhitecapsに帰属します。著作者に無断で改変、転載、再配布してはいけません。

「――ダルいなあ。」

あかつき

暁は会社の昼休み、一人で会社のすぐ近くの公園で噴水の縁のコンクリに腰を下ろし、昼食をとっていた。その日は夏のような日差しが照りつける日で、昨日まで雨と共に数日続いていた寒さはどこに行つたのか驚くぐらいだった。噴水では子供達が数人水と戯れていた。水しぶきが飛び交い、淡い虹ができる。母親たちだろうか、近くの木陰の下のベンチで、帽子で顔を仰ぎながらとりとめのない会話をしていた。暁は近くのコンビニで買ったメロンパンの空き袋を左手でクシャリとつぶしながら持ち、右手でコーヒー牛乳の紙パックを持ちながら、ストローでそれをすすっていた。遠くにカラスタちが道に散乱した食べかすをつついているのが見える。

ほんつと、ダルい。

暁はとある街に住んでいるソフトウェア会社に勤める新人の会社員だ。フルネームは虎部暁<sup>とらべあかつき</sup>。ついこのあいだに大学を卒業し、その業界では大手の会社に就職した。新たな気持ちでやる気を持って仕事を始めたか――といえばそうではなく、暁は早くも五月病にかかり、マンネリとした日々を送っていた。そして（こんなままじゃいけないよな）と悩みながらもそのマンネリから逃れる術は見つけられずにいた。

暁は会社などの周りの人から見れば非常に無愛想な感じを受ける性格だった。もつとも、昔からそういうわけではなかったが――。でもここでその説明を入れるのはやめよう。話が長くなるだろうから。

暁が昼休みの終わりに会社に戻ると、同僚たちとその上司は仕事が終わっ

た後の飲み会の予定についてわいわいガヤガヤ相談していた。

「おう、虎部。今日飲み会顔出せよ。」

暁の同期の同僚の金井が言った。

「いや、おれはいいや。なんか、早く家に帰って寝たい気分だから」

「またかよ、つきあいわりいなあ。いつも一人だけ早く帰って何やってんだ？ テレビゲームか？ たまには外でパーツと遊んだらどうだ。今日飲み会の前にカラオケにも行くらしいぜ。俺がこのハスキーな声で『津軽海峡冬景色』歌ってみんなを驚かせてやる」

「なぜに津軽海峡……おまえ何歳だよ。」

暁が軽く引いていると、横で話を聞いていた課長のめがねが光った。

「虎部、いいか、うちの課の方針は『和をもって尊しとなす』だ。飲み会にはうちの課の人間は全員出なければいけない。これは業務命令だ！——つておい、聞いてんのか！」

「お疲れ様でした」

バタバタと書類をカバンにつっこむと暁はオフィスの部屋の押し扉を開いた。廊下から生ぬるい風が吹き抜けてくる。（省エネのため廊下には冷房が効いてないのだ。）そのまま生ぬるい空気に包まれたまま、暁は会社の門を出た。そして真夏を感じさせる陽光の中、駅を目指して人混みのなかに紛れていった。

暁は仕事に打ち込みかねていた。彼は新開発のソフトのインタフェース部分を担っていた。彼には悩みがあった。それはたとえばソフトはシンプルに作った方がいいのか、それとも多機能に作った方がいいのか、と言ったことだった。シンプルに作ればソフトは正確に動き、バグと呼ばれる不具合は少ない。しかし使いやすさを考えれば当然ソフトの設計は複雑になる。またマーケティングからせかさされているユーザーの要望のことを考えればたくさんの機能を追加しなければいけないが、機能を追加すればするほどソフトの

動作はのろく、複雑になる。それに加えて、同僚の多くは設定の度にダイアログボックスを開くインタフェースにしているが、暁はこれも気に入らなかつた。彼はパレットをもつと活用したかつたのだ。同僚達はパレットにはヘルプや図の検索などおまけ的な要素しか入れなかつたが、暁は選択されたオブジェクトの書式などの設定にもつと使うべきだと考えていた。この同僚との考え方のギャップが暁のやる気をさらにそいでいた。

「――。」

会社を出た暁はどこにも寄らず、重い手で家の扉を開けた。キイイイ、バタン。扉がうなる。鍵を閉めると奥の部屋から一匹のミニチュアダックスフントが駆け寄ってきた。

「おう、ポチ。」

暁はその犬の頭をなでたあと、ポストに入っていたチラシに紛れて往復ハガキが混じっているのに気がついた。

「アーチェリーサークルの同窓会、か。」

暁は大学でアーチェリーサークルに入っていた。そこからの手紙だつた。〇〇で集まろうという企画だ。

「やれやれ、どうするかな。」

大学の友人と会うのは楽しみだろが、最近の暁は何かにつけてダルかつた。いちいち行くのも、めんどくさい。

そして暁はその往復ハガキを抜くと、暁は他にはめぼしい手紙は来ていないのを確認した。そしてチラシを置きに、リビングに行った。するとリビングに暁と同じくらいの年齢らしき女性がイスに逆向きに座りながらテレビをリモコンで操作している。

「おかえり。またただいまも言わず帰ってきたね。」

「うつせーな。誰がいるわけでもないし、ただいまなんか言わなくてもいい

だろ。」

「あら、私がいることを忘れたのかしら」

「おまえは家族でも何でもない。」

ここで説明を入れよう。今暁が話していたのは暁が言うとおりに家族ではない。今暁が話していた相手は八田美佳。ルームシェアをしている幼なじみの腐れ縁の女性だ。虎部はアパートの借り賃の負担を安くするために、美佳とルームシェアをしていたのだ。さつき玄関にかけてきた犬の方はセーブという名前の犬で、美佳が連れてきた犬だ。（「セーブって球団の名前か？」と暁は美佳に言ったことがあった。）暁はこの犬のことを単にポチと呼んでいるが、美佳はその呼び名は不満がつている。なかなか人なつっこくかわいい犬なのだが時々フツと姿が見えなくなったりして、美佳を心配させている、そんな犬だ。――暁はイスに座り新聞を開いた。

「そもそもがおまえに家賃を負担させようとしたのが間違いだったんだよ。おかげで家賃けちられて冷蔵庫の食べ物勝手に食べられて、こっちは財布すっからかんだ。おまけに起きてる間中テレビは占領されるわで。くだらない芸能ニュースばっか見てな。」

暁が着替えようと部屋に行こうとしたとき、美佳が冷蔵庫の中から勝手に見つけたチョコレートケーキを食べながら唐突に言った。

「それにしても驚いたわあ。ギョーに恋人がいたなんてねえ。」

「ん、なんのことだ？」

「しらばっくられてもダメだよ。ほら、この手紙、あんたの恋人からの手紙。」

ちなみにギョーとは暁のことだ。「虎部暁」、下の名前が「あかつぎ暁」、だから略して「ギョー」だ。美佳はいつも暁のことをそう呼んでいる。あかつぎ暁という名前は呼びづらくもあるし、暁もそれを黙認していた。

「ほうら。」

美佳がニヤニヤ笑いながら暁の肩を突つついて、手に封筒をヒラヒラとさせた。

「ああ？」

暁は美佳の手からパツとその手紙を奪い取った。

「——っというか、いつも思うんだけど、おまえなに人への手紙勝手に開封してんだよ！」

その手紙は上端が破られて開封されていた。

「いやー、ギョーに女性からの手紙だなんて、珍しいなあと思って、ついっ  
い。」

美佳は暁の買ってきたお菓子は勝手に食べ、届いた郵便物も勝手にあける。そういう奴だ。暁はその度に注意していたが、美佳が全然聞かないので最近  
は注意するのもめんどくさくしてしていなかった。

「全く、詮索好きなんだからな。」

暁は封筒の宛先人の所を見た。

「寅部暁様」

「……俺の名前間違っつてやがる。誰だあ、この宛名書いたやつ。」

暁はパツと封筒をひっくり返して差出人欄を見る。差出人の名前が上品なき  
れいな字で書いてあった。

なりだからえりこ

「成宝絵里子」

住所は書いてなかった。

「だれだ、これ……。」

暁が少しの間その差出人名を見てみると、

「フフーン。」

美佳がニヤニヤ笑みを顔に浮かべながらうなづいた。

「ちつつち。甘いねえギョー。しらばっくなくても無駄だよ。なかにあんた

の恋人だつて書いてあるんだから。」　そういつて大仰に腕を振る。

「てめえ、中まで読んだのか……。」

「ほう、そういうところを見ると、認めるわけね。浮気をしたつてことも。」

「浮気い？　なんのはなしだよ！　俺の知り合いにこんな名前の奴はいない。大体俺が人にモテなくて幼稚園の頃から恋人がいないつておまえも知つてるだろ！」

「ふう。そういえばそうだねえ。こんな幼稚で短気で無愛想な奴に女性が惹かれるわけないもんね。しかつし幼稚園から恋人がいないなんてほんのとことまで言つちやうなんてねえ。少しはためらつたらどうなの。」

「大きなお世話だよ。だいたい宛先人は寅部曉一様つて書いてある。俺の虎とは字が違うし、しかも俺の名前には『一』いちなんて付いてない。」

「もしかして、前遊びに来たドンちゃんからじゃない？　あの人鈍そうな感じだつたし。間違えて書いて送つてきたのかも」

「おまえそれ今度当人の前で言つてみるよ。――あいつはあれでも漢検一級取得者だ。それにあいつは男。ここに差出人が成宝絵里子つて人だつて書いてんだろ。」

「そつか。」

曉はバサバサと封筒の中から中身の手紙を引き出すと、手紙の内容を読んでみた。

###

寅部　曉きょういち一様へ。

お久しぶりです。絵里子です。いつも何度も手紙を出して済みません。で

もなかなかあなたからの手紙が来ないので、筆を執らせていただいています。

最近はいぶ暖かくなってきて、庭のビワの木も実がなってきました。できれば実をとってあなたに届けたいのですが、さすがに大きな荷物を作るとお母さんに見つかってしまうので、手紙だけですませさせていただきます。

――私は最近お菓子作りをはじめました。ケーキを焼いたり、クッキーを作ったり、プリンを作ったり、まだまだ初心者ですが、いつかおいしいお菓子を作れるようになって、あなたにも食べさせたいと思います。

###

以下、かなり気持ちを入れてかいたらしく、彼女の近況を示す事柄が数ページも書いてあった。そして、美佳が言っていた部分まで読み進んだ。

###

唐突で申し訳ないのですが、最近あなたが他の女性とつきあっているという話を小耳に挟みました。もしあなたが好きでそうするのなら仕方ないことでしょう。でも私としては別れの返事でもいいからあなたから何か伝えて欲しいのです。最近ぱったりとあなたからの手紙も届かないようになり、私は寂しいです。もしあなたが私のことを少しでも頭の隅に置いていてくれるのなら、手紙で返事を送ってください。（携帯は親に禁止されているので、電話やメールは使えません。申し訳ありませんが手紙でお願いします。）

あなたの親愛なる絵里子より

###

「――ふうむ。」 暁はため息をついた。

「ギョー宛じゃないとすると、これはいったいどういうことかな。」

美佳が急にまじめな顔になって、顎に手を当てた。

「うーん。『荷物を作ると見つかってしまうので』、とかどういう意味なんだ？」

「なんか『お忍びの恋』ってとこなのかな」

暁はもう一度差出人を見た。

「宛名は似てるけど、こんな人知らないしな。」

「――宛名は似ている。うちに届いた。住所はあつてる。でもこっちは相手のことを知らない……ン！」

「どうした？」

美佳は手紙を見ながらしばらくチョコレートケーキで口をモグモグさせていたが、無理矢理飲み込むと言った。

「もしかして、この部屋を前借りしてた人宛なんじゃない？」

「前借りしてた人？」

暁は眉をひそめながら聞いた。

「ほら、あたしたちは今年の春からこの部屋借りてるじゃない。その前にこの部屋を借りてた人がこの寅部暁一って人なんじゃない？」

美佳はピンと指を立てた。

「うーむ。」

「それで前ここに入っていた寅部暁一って人がまだここにいるんだと思ってこういった手紙を送ってきてるんじゃないかな。」

「名前も似てるから配達員の人も気づかなかったってとこか。」

暁が手紙をテーブルの上に放ると、美佳が付けている腕時計のアラームが「ピピッ」と鳴った。

「あつ、もうこんな時間。ごめんギョー。あたしバイトあるんだ。」  
美佳はイスに置いてあつた手提げバックをつかむと玄関の方に走っていった。セーブが「ワンワン！」と吠える。

「あいつ俺の買ったチョコレートケーキ食いやがって……」  
暁はテーブルに残された皿を見て呟いた。



「そうそう、前々から思ってたんだよ。あんたの名前が似てるって。」

後日、二人は大家さんの所を訪ねた。この大家さんは「言法座保」さんという珍しい名前の人だ。この言法座さん、なかなかの太っ腹で借り手には家賃は一ヶ月「万で部屋を貸していた。しかも部屋は他のアパートに見劣りしない。ちなみに言法座さんの頭はきれいな禿頭で、日光の下では「太陽が映る」とアパートの借り手たちの中では有名だった。

「ちよつと、あんたたち、そこ見てんじやないよ。私の頭に用がある訳じゃないだろ。」

「あつ、すいません、つい……。」

二人は言法座さんにこの手紙について何か知らないか聞いたのだ。

「話続けるよ。あんた達の所の部屋は、前はその寅部暁一って人が借りててね。礼儀正しい男性だったよ。このアパートのほかの部屋の人にも挨拶もしっかりしてくれてね。それに引き替えあんた達ははうれしくないねえ。一人は愛想がないし、一人は愛嬌がないし、貸してる部屋は汚すし。それに

家賃は払わないし、と言おうとしたが、美佳が話を最後まで聞かずに質問した。

「あのつ、その寅部曉一つて人が今どこにいるかわかりますか？」

「うむ。そういえば実家に帰るとか言ってたかな。」

大家さんは無理矢理話を切られてつばを飲み込んだ。

「その人の実家の住所、わかります？」

曉が食いつく。

「それは個人情報だから言うわけにはいかんな。」

言法座さんは腕組みをした。

「そこつ、言法座さん。そこを何とか、教えていただけませんか！」

美佳が手を合わせて頼み込んだ。

「最近個人情報扱いが厳しくなつてな。何かあつたら私も責任を問われかねないしな。――」

「その人の所に行けば、お金の算段が付くんですよ。たまつてる家賃もそれで払えますから。どうか、教えてください！」

「むう。」

大家さんは顎に手を当てて宙を見ながら、困つたような顔をしていたが、

「ほんとに、家賃払えるんだな。――なら、教えよう」

わざとらしく一人でウンウンと頷いた。

「やった、ありがとうございます！」

美佳は大家さんの手を取りながら喜んで飛び跳ねた。

「ワシも正確に覚えている訳じゃないが、帳簿に載ってるだろうから、調べてくるよ。」

そういうと、大家さんは部屋の中に入つていった。

「おまえ、あんなうそ付いてまで何でそんなに知りたいんだ？」

曉が訝しそうに美佳に聞いた。

「だって、あんなラブレター、見るの初めてだもん。気になるじゃない。——それに、何か気になるのよね——何か私の第六感にピンと来るの。」  
「そうかあ？」

しばらくすると大家さんが部屋からノートのようなものを持って出てきた。

「これだ、これ、ここに載ってるよ。えーと。寅部暁——」  
大家さんは住所を読み上げた。

「住所は、『大矢野郡上天草の・25・1』だ。」

「ええつと、メモメモ。もう一回言ってもらってもいいですか。」  
言法座がもう一度読み上げると美佳がポケットからシャーペンを取り出してメモした。

「もうわかったな。それじゃ、なるべく早く家賃払ってくれよ。」

「はい、もちろん。ありがとうございます！」

とりあえず用事は終わったと言うことで、美佳と暁は自分たちの部屋に向かった。

「よし……これで手がかりがつかめたぞ。後は芋ズルのようにぐいぐいと——」

美佳は芋づるを引くまねをした。



数日後、二人は出かけた。もちろん、行き先は大家さんに住所を教えたもらった寅部暁一の実家だ。その日も夏が一步先に来たようなとても暑い日だった。二人はメモに書かれた住所を時々手に持ちつつ見ながら、大家さんに教えてもらった寅部暁一の実家にたどり着いた。五月だというのに狂いぜミが鳴いている。暁と美佳はその寅部の実家という家を見上げた。なんと言うことはない。住宅地に建ってる日本風の普通の一戸建てだ。ちよつと歴史

を感じさせる建物では合ったが、別段なんと言うことはない。玄関の横の車庫には犬が鎖に繋がれていた。柴犬だ。

「おう、ポチ。」

暁が手を差し出すと、その柴犬は暁の手のひらを舐めながらしつぽを振った。

「あんた、どんな犬にもポチって呼ぶよね。」

「じゃあ、シバだ、シバ。ようよう。」

柴犬が暁にじゃれる。何も飼わないわりには、暁は動物と戯れるのが好きなのだった。

「どつちでもいいけど……早く、家の人に話を聞こうよ。」

アルミ製の門の前に立つと、暁はその家のインターフォンを押した。ベルの電子音がピンポン、ピンポン、と二回鳴る。

「はい」

スピーカーから年配の人だろうか。女の人の声が出た。

「こんにちわ。」

「にんにちわー。」

「暁一さんいらしゃいますか？」暁がマイクに話しかける。

「えっ、暁一？」

その声が聞こえてから、声の主はインターフォンの奥で考えていたらしく、少し間があつたが、またスピーカーからこういった。

「あなたたち、暁一のお友達ですか？」

「えーつとですね……」

今度は暁が言葉に詰まった。どこに顔も合わせたこともないアパートの前居者の実家を訪ねる奴がいるだろうか。暁が答えに困っていると、美佳が暁を押しつけてインターフォンに話しかけた。

「はい、大学の頃の友達です。暁一さんと少し話がしたいと思って。」

すると、インターフォンの声は小さな声になって言った。

「大学のお友達ですか。まだ伝わってなかった人がいたのね……。ええつと、実は暁一は二ヶ月前に死んだんです。ですから、せつかく来てくださつたとは思いますが、残念ながら暁一と話をすることはできません。」

暁と美佳は顔を合わせた。死んだだつて？

「なくなられたんですか……。あの、今インターフォンにでてるのは暁一さんのお母さまですか？ ご本人から直接でもなくてもいいので、もつと詳しく暁一さんの話を聞きたいのですが。」

「ちよつと待つてください。」

その声がした後、インターフォンはがちゃつと言つて切れた。

「……もしかして悪いこと聞いたんじゃないのか？ インターフォンも切れちまつたし。」

暁は口をとがらせた。

「ここで遠慮してどうするのよ。それに『ちよつと待つてください』つて言つてたでしょ。話、してくれるのよ。」

「ほんとかあ？」

しかししばらくすると、キィと金属扉がすれるような音がして二人の目の前の家の扉が開いた。扉の陰から年配の女の人の顔が出てくる。たぶんインターフォンにでていた人だろう。

「わざわざ来ていただいたありがとうございます。あの、外は暑いですし良かったら涼しい家の中で話をしませんか。お茶とお茶菓子も用意しますよ。」

二人は家の居間に通された。中は軽く冷房が効いていた。暁と美佳は居間に行くまで家の中を見回してみたが、先ほどでた暁一の母親と思われる人以外、家の中には誰もいなかった。二人は和風の低めのテーブルの前に正座して座り、暁一の母親らしき人を待った。じき、さつき暁一のお母さんに言わ

れたとおり、白磁の涼しげな茶飲みに入ったお茶と、お茶菓子として本物の葉っぱが付いた、あんこの入れられた透明なくず餅が用意された。

「あの一、こんな初対面の人なのにお茶菓子まで出してもらって済みません。」

「ほんと、おもてなしありがとうございます。」

暁は正座をしたまま頭を下げた。実は暁は正座は苦手なのだが、そんなこと言っている場合ではないので我慢している。

「私は暁一の母親の悦子と申します。わざわざ暁一に会いにこんなところまで来ていただいて。それなのに、暁一と言ったら……話もできず……。」

悦子と名のつた暁一の母親は隣の部屋の仏壇の方を見た。美佳と暁がそちらを見ると、仏壇の上に二人のモノクロ写真が置いてあった。片方は白髪で、どうも暁一の父親のようだ。もう一人は、若い男性の写真だ。美佳と暁はそれが亡くなった暁一だとわかった。

「うちは子供は一人息子なんです。それが暁一で。暁一は孝行息子で、よく私たち二人を旅行に連れて行ってくれたり、買い物なんかは買い出しに行ってくれたりして、ほんと助かってました。」悦子さんは息を飲み込んだ。

「それが、二ヶ月前に突然死んで。」

「何で亡くなられたんですか。」

美佳が聞いた。暁は横で聞きながらクロモジでできた楊枝をつかっくず餅を切つて口に運ぼうとした。き、切れない。

「うちの息子は写真家だったんですが、仕事で海の近くの断崖に行つたとき、崖を降りようとして足を滑らせたんです。」

「そうですか……。」

「身内が言うのもなんですが、暁一は業界では結構有名な写真家で、「わたしはヤドカリ」とか結構写真集なども出してたんですよ。」

ブツ、ゴホツゴホツ。突然暁はむせた。

「もう何やってんのよ。ギョー。」

美佳が暁の背中をどんとたたいた。

「サンキュ。でも、「わたしはヤドカリ」って……?」

悦子さんがお茶を差し出す。暁はそれを飲んでノドを洗った。ふう、と息をつく。

「何言ってるのよ、有名じゃない。あんたもたまには芸能ニュースとか見たらどうなの？ ああ、ほら「わたしはヤドカリ」って海の生物をヤドカリの視点から撮ったって、受賞された写真集ですよ。あれ暁一さんが出してたんですか？」

「そうなんです。知っていたらいただいて光栄です。あの写真集はこの近くの海辺で撮った物なんですよ」

「道理でなんか見たことあるような気がしてたんだ！」

美佳は暁のことはほつといて勝手に手をこぶしでたたいて合点した。

「あ、あの、暁一のお友達と聞きましたが、失礼ながらお名前は……。すみません、わたしから聞いて。はじめて会ったものですから」

悦子さんが微笑んだ。

「ほら、あんた自己紹介。」

美佳が暁の横腹をつつく。

「あ、私は虎部暁と申します。あ、あの、暁一さんと名前が似ていますよね。大学では暁一さんと一緒にギョウキョウコンビといわれまして……」

「まあ、私たちと同じ、寅部さん？」

「漢字はちよつと違うんですが、まあ、そんなところですよ。」

「私、八田美佳と言います。暁一さんのファンですよ！」

背を伸ばしてすつと間をおいたあと、美佳は急に背を丸めて顔をうつむけた。

「あ、すみません、私、先ほど嘘をつきました。私たちは大学の友達じゃありません。私たちは暁一さんが入っていたアパートに暁一さんの次に入った住人なんです。」

「まあ、」悦子が驚いて目を開いた。

「ほんと、うそついてすみません。是非とも話を伺いたかった理由があったもので……。」

美佳は膝に手を当てて、まぶたを強く閉じながら謝った。で、またいきなり笑顔になると

「で、こちらの小坊主は虎部暁と言いまして、暁一さんとよく名前が似ているんです。」

手のひらで暁の方を指す。

（小坊主……。）暁は美佳の方をじろつと見た。

「暁一が入っていたアパートに新しく入られた方だったんですか。それはそれは、私が言うのもなんですが、不吉と言われてもおかしくないところに入らせてしまつて、申し訳ありません。」

そうか、言法座の奴、いくら知らないからつて、俺たちに曰く付きの部屋を貸したのか。暁は横を向いてうなつたあと、もう一度悦子さんの方を見ると口を開いた。

「——それでその話を伺いたかった理由なんですが、私の所に恋人を名のある女性から間違いで手紙が届きまして、それは暁一さん宛のものだったんです。それで大家さんに暁一さんの実家の住所を聞いて、私たちは今ここに来てるというわけです。」

「暁一に恋人から？」

「そう。内容は暁一さんの浮気を詰問する内容でした。」

「暁一に恋人がいるなんて初めて知りました。ほんと、私もはじめて聞きました。——しかし、浮気というのは——。私が言うのもなんですが暁一はなんの理由もないのに浮気をするような人間じゃありませんわ。」悦子さんは目を伏し目がちにした。

「……そうですか。たぶんその手紙をよこした女性は、暁一さんが亡くなつたことを知らないんじゃないかと思えます。それで、手紙がなかなか来ない

ので暁一さんの心が離れたのだと思います。」

「その人は成宝絵里子さんという名前なんですが、手紙には差出人の住所とかは書いてなくて。悦子さん、何か知ってることはありませんか？」

「私は恋人の話なんて一言も……。仕事一筋の息子でしたから、女っ気なんて全くなくて。」

悦子さんは首を振った。

「暁一さんが亡くなる前に言っていたこととか」

「私が暁一の運ばれた病院に行ったときは、もう既に暁一は死んでいたんです。暁一の最後を見たのは、救急隊員の方達です。」

「そうですか。」

「じゃあ、救急隊員の方をあたれば何かわかるかもしれないんですね？——。その救急隊員の方はどこにいらっしやるんですか？」

「ええ、暁一の手当をしてくださったのは、うちの近所にある消防署に勤めている方達です。」

「よし、次はそこあたってみよっか。」

美佳が手をグツと握ったみせた。

「どうも、いろいろとお話ししていただきありがとうございます。」

「いえ、何かあればいつでもどうぞ。」

足が、痺れて——。暁は立ち上がるにつまずいた。



数十分後、二人は悦子さんに教えてもらった消防署に来ていた。街の中心部の近くにある消防署で、消防署のすぐ外の道路にはたくさんの車がひっきりなしに走っていった。自動車から出る排気ガスが、日に熱せられてもやもやとしているのが遠くからでも見えた。

二人が車両倉庫の前でだれかつかまえられる人がいないか待っていると、サイレンを鳴らしながら救急車が入ってきた。敷地内でその救急車が止まり隊員の人が降りると、すぐにバツクの扉を開いた。

「何で病院に運ばないんだ！　うちに患者を運んできてどうする！」  
救急車の中の人と消防署の人が言い合っている。

「AEDを使おうとしたら故障してて。ここにも置いてあるでしょう！？  
気管支内挿管もしなければいけないのに、やれる奴が一人も乗ってないんですよ！」

「AEDに気管内挿管だあ？　いったいどういう患者だ！」

「――バイタル落ちてきてるぞ！」

その場はバタバタとした雰囲気にも包まれた。

「ちよつと、ちよつとあんた達、邪魔だよ。そこどいて。一般人は入場禁止だよ？」

消防署の人が暁と美佳を見つけて怒鳴りつけた。

「す……すみません。ちよつと救急隊員の方にお話を伺いたくて」

「話い？　向こうの部屋に人がいるから、そこで聞きな！」

「はー……い。」

二人はいわれたところに行ってみた。建物の外に面した一階にある部屋で、数人の人が事務所内で事務作業をしている。受付のような所だ。

「もしもーし、ちよつとお伺いしたいことがありますして、よろしいでしょうか！？」

その中の一人がめんどくさそうな顔をしながら暁達の方を振り返った。

「なんだい？　ソバの出前ならもういらないよ。全く、消防長ったら年越しはとつくに終わったのに救命士にまでソバ食わせるんだから。いくら自分が好きだからって」

「いや、ソバの出前じゃなくて、聞きたいことがあるんですが。」

「聞きたいこと？」



「ああ、寅部曉一さん！あの人か。あんた達運がいいねえ。私もあの人の手当をした一人だよ。あの人は岩に頭をぶつけて頭からすごい出血をしてくれている。寅部さんが倒れているのを見つけた人から通報があつて駆けつけたんだけど、出血の具合が激しくて、間に合わなかつたんだよ。私たちも可能なことはすべてしたが、それでもダメだった。それにしてもほんと君たち運がいいねえ。私は稲垣富一！ここの消防署では一番の力持ちだ！トミーと呼んでくれたまえ！」

「曉一さんは最後何か言つてませんでした？」

美佳は最後のいくつかのセンテンスを無視して言った。

「えーっと、彼はだいたいふ意識が薄らいでただけど。そういうえば、『彼女に、これを渡してくれ』つて最後言つてね。そう、これを渡されたよ。」

話をくじかれて急にテンションが普通に戻ると、その隊員はある物をポケットから取り出した。巻き貝の殻だ。小さな殻だったが、光沢のある白い表面にうつすらと青い縞が入っていて、どことなく気品のある美しさがあつた。

「彼女つて誰だいつて聞いたんだけど、『絵里子、一緒に灯台に行けなくてごめんな。——俺はおまえを幸せにはできなかつたみたいだ——』つて言つたきりです。」

「！」二人は息をのんだ。

「寅部さんの親戚とか、絵里子つて名前に関係しそうな人はあつてみたんだけど、結局見つからなくて、こうやって渡さずじまいなんだけどな」

ついに曉一から絵里子への線がつながつた。

「ほかに何かわかることは？」

美佳がせかしたが救急隊員の人は頭を振った。美佳は息をついた。

「ほんにねえ。あの人が死ぬ必要ななかったと思うんだけど。何の神の采配だか……。そうそう、君たち、その絵里子って人を探してんなら、見つけたときにこれを渡してくれ。そうすればあの人の魂もちつとはうかばれるんじゃないかな。」

そういつて稲垣と名のつた救急隊員はさっきの貝の殻を暁に渡した。



「うわあ、いい景色！」

美佳が感嘆の声を上げる。二人は現場がつかみたくて、救急隊員の人に教わった、暁一が死んだという崖に来ていた。二人は崖のすぐ手前の駐車場にスクーターを止めた。海岸の方に少し歩くと、海が見えてくる。黒い鋭い岩場でできた険しい崖のような地形の下に、砂浜があり、コバルトブルーの海が続いている。遠くにはアジサシだろうか。鳥が飛んで魚を捕らえているのが見える。ここは地元でも有名な景勝地なのだ。美佳はしばらくの間口を開けながら海を眺めていたが、真剣な顔に戻ると呟いた。

「ここ、なんだね。暁一さんが亡くなったのは。」

「ああ。」暁も相づちを打った。

「この崖の具合とか言ったらまるで火サスみたい……。奥の海はこんなにきれいなとこなの——」

そのとき、後ろからザツざつと足音が聞こえてきた。

「あんたたち、アイスはいかがかな？」

ビクッ。二人はここに誰もいないと思っていたので、後ろから声を掛けられて驚いた。

「っ、ビククリしたー。いきなりなんだ？」

二人は声の方を振り向いた。するとじいさんが、車輪のついたちっこい箱の

ようなものを引いている。どうも小型の冷凍庫らしい。車には「アイス」と白文字で書かれた赤い旗がさしてあった。

「ワシはこの場所で夏の間だけアイスを売ってるんじゃないよ。あんた達もいかがかな。一本200円だが」

高え。暁はじいさんをにらんだ。

「あの、俺たち寅部暁一って人が2ヶ月ほど前にここで亡くなったって聞いて来たんですが、そのことについて何か知りませんか？」

そのおじいさんは指で円を作って見せた。

「アイス買ってくれたら教えてやる。」

「むー。」

美佳はうなつたが、

「わかった、買う買う！」勝手に決めた。

「えー、一本に200円!？」暁は叫喚を上げた。

「ギョー、お金持つてるでしょ。」

「しかも俺が払うのかよ!？」

「情報料じゃ」

「ふう。」暁は渋々財布をポケットから出した。



「——えっ、ここで死んだ人が他にもいるんですか」

暁が驚いた声を出した。

「そう、ここらあたりは毎年人が落ちて死ぬって有名なところなんじゃ。」

「じゃあ、寅部暁一って人もそのたぐさんいる死んだ人のうちの一人なんですよ。」

暁たちは駐車場の区切り用のネットに寄りかかってアイスを舐めていた。暁はアイスは好きなメロン味を頼んだ。美佳はストロベリー。じいさんも宇治

金時アイスを食べている。商売ものを自分で食っていいのかよ。暁は心の中で呟いた。

「他には何か知ってることは？」

「ない。」

「えーっ!？」

「おいおい、情報つてそれだけかよ。」

「その男性が亡くなったとき、ワシはぎっくり腰で家にいてな。だから事件については後で聞いて知ってるだけで、詳しいことはしらんだ。その日はばあさんが代わりにでてたけど、ばあさんは何も言っていなかったしな。」

「なんだよそれーっ。あたし達がアイス買った意味がないじゃん。」

「もう食ってしまったモンは戻らん。」

「2000円もかかってたつたそれだけの情報なんてぼったくりだよー!」  
「0円づつ返せよ!」 美佳が怒り出した。「いい、私はこれでも柔道は黒帯、剣道も黒帯、あんたもあの崖の下に投げてー!」

剣道に黒帯とかあんのかよ。それに金払ったの俺なんだけど。暁はメロン味のアイスを舐めた。そして、

「ん？」

暁は海岸線沿いに続く崖の、遠くにいる影に気がついた。

「どうかしたの、ギョー。」

アイス売りのじいさんと問答をしていた美佳が気づいて暁に聞いた。暁は目を凝らした。

「ほら、あそこに男の人が立ってねえか? 海の方向いて立ってる。」

美佳も目を凝らした。

「あたしには……ちよつと見えないよ。あたしどつちかというとな近眼だから。」

「あんなところに立ってたら危ねえじゃねえか。」

「——注意しに行つた方がいいかな。ここの場所は危ないって。」

すると、アイス売りのじいさんが目を細くして呟いた。

「ふむ、あの男か。」

「えっ？　じいさん、あの人が知ってるのか」

「ああ、しつとるよ。ワシも遠視だしな。あれは時々ここに来る奴じゃ。アイス全然買ってくれんからワシはあの男には興味ないがな。」

「ふーん。」

「ちよつと話そらさないでよ。アイスのお金、返してもらおうからね。」

「もう、うちだつて家計苦しいんじゃないか。少しは恵んでくれてもいいじゃろ！」

二人がいつ終わるともない問答を続けているうち、遠くに見える男は車に乗り込んで走り去っていった。

その夜、二人は家に帰って朝見忘れた新聞を読んだり、リンゴジュース（混濁したやつ——美佳がこつちが好き）を飲んだりしてゆつくりと時間を過ごした。暁が風呂から上がってきてタオルで頭を拭いていると、また美佳がケーキを食べている。

「おい、おまえ自分でケーキ買ってくるなんて、風邪でも引いて頭おかしくなったのか？」

「いっしゅん美佳は無言だった。」

「——いや、絵里子って人、今どうしてるのかなって思つて。周りの人は全然その絵里子って人のこと知らないし、全然暁一さんが死んだってことも伝わってないじゃない。恋人から連絡もないなんて、つらいだろうなあと思つて。だつて、絵里子って人は、暁一さんが浮気してるんだと思ひこんでいるんでしょ」

「そうだな。ああ、絵里子って人の住所がわかれば、もつと状況は展開してくれるのにな。」

「そうだね……」

暁の目に美佳が食べているケーキとまった。ストロベリーケーキだった。

(――ストロベリーか。)

暁は昔のことを思い出した。

美佳がストロベリーケーキを食べているときは、決まって昔の失恋を思い出しているときだった。暁が高校生の時の話だ。ある日のバイトの帰り道、暁は美佳が公園でブランコに座り夜一人泣いているところを見た。いつもは勝ち気な美佳が、一人で泣いていたのだ。暁は声を掛けようと思ったが、すぐに思いとどまって、物陰からそれを眺めていた。そして美佳のほうは涙で顔をぬらしながら、しゃくり上げながら、一人でケーキを食べていた。そのケーキは美佳が恋人と一緒に食べようと思って買ったものだった。その涙が失恋が原因だったと暁が知ったのは後の話だ。もつとも、暁がその様子を見ていたことは美佳は知らなかったが。それ以来ストロベリーケーキは美佳にとって特別なものになった。

今日それを食べていると言うことは、美佳がそれだけこの問題を深く捕らえていると言うことだ。

「元気出せよな、美佳」

「――ん？なんで？」

「いや、なんでもない」

暁はあわてて自分の部屋に引っ込んだ。

「ふあああああ。眠みー！<sup>ね</sup>」

次の日の朝、暁は新聞を取りに玄関のポストまで行った。ガサガサと新聞受けから新聞を引き出すと、パサツと床に落ちたものがあつた。

「おーい、美佳！ 絵里子さんからの手紙がポストに入ってる！」

それは絵里子からの手紙だった。また送られてきたのだ。

「えっ！ちよつと待ってて！今顔洗うから！」

美佳が眠い目をこすりながら廊下を走ってきた。

「それはいいけど、今テレビでも言ってるとおり湯水とか言うことで断水してるぜ。」

「ええっ もう、こんなときに限って！ 冷蔵庫のお茶で顔洗ってくる。」

「こらあ、おまえ、お茶を雑用水代わりに使うそのくせやめろ！昨日入れたばかりなんだぞ！」

美佳はそれも聞かずバタバタと台所に向かっていった。そして玄関のほうに振り返って、

「ギョー、私が来るまで封開けないでよ！」

と叫んだ。

「――まったく、人の手紙は勝手に開封するくせにこういう時は人を待たせんだから。」

暁はため息をついた。

\*\*\*

――灯台で待っています。――

二人がリビングの照明を付けて手紙の封を開けると、そんな内容が書いてあった。

###

寅部暁一様へ

あなたの意思を確認したく、いりやう11月17日の夕方、入堂岬の灯台で会いましよう。待っています。

書いてあるのはこれだけだった。

「……何で灯台なんだ？」

「……！ わからないけど、今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ！  
夕方、あんた夕方用事開いてるわよね。出かけるわよ！」

美佳がバンとテーブルをたたいて言った。

「おい、出かけるってどこにだ？」

「その灯台に決まってるんじゃない。出かける準備しといて！ 地図、ネットで検索して印刷しといてよ！」

「えっ？この灯台に？ ——おい、本当に行くのかよ」

「そよ！ ええつと、折りたたみ傘どこに置いてたっけ。」

美佳は自分の部屋に狭い廊下を走っていった。

美佳と暁は夕方になるまで、お茶を何杯も飲んだり、置いてあるピアノを掃除したり（美佳が昔ピアノをやっていた）して、そわそわした時間を過ごした。そして、手紙に書いてあった約束の時間が来た。

「ほら、ヘルメットかぶって」

二人は外に出て、止めてあるスクーターにまたがった。

その時、セーブがスクーターの後ろについているカゴに飛び乗った。

「おい、ポチがカゴの中乗ってるぜ！」

美佳はフフーンと笑うと、

「いいでしょ。セーブと一緒に走れるように、カゴ付けといたの。」  
エンジンを吹かした。

「おまえ、このスクーター車検通らねえんじゃないの？」

暁は心配したが、

「ヘルメットを忘れずに！　じゃ、美佳、行きます！」

「暁、出る……とか言わなきゃダメ？」

ブルルルル……。美佳はスクーターを発進させた。家の近くの一車線の道を通り抜け、しばらく二人は国道を走っていく。天気は晴れだが、冬のように空気は刺すように冷たかった。二人は出かけるときに厚着をして寒さに備えていた。

スクーターは、森の中の道に入った。遠くに灯台の先端が見えてくる。

「あれが絵里子さんが待つてるという！」

「あの灯台だね！」

しばらくして、二人は灯台の下の更地に着いた。美佳がヘルメットをとると、さびた看板が目に入ってきた。

入堂灯台入り口

所々ペンキが剥げ落ちている。

「おい早く上に上ろうぜ。」

スクーターを降りた暁は灯台の塔の入り口の扉を押したり引いたりしてみたが、

「あれ？　あれ？」

カギが掛かっているようだ。扉は開かなかった。それもそのはず、暁は見落としていたが近くには「立ち入り禁止」と赤字ででっかく書いてあった。

「ここ立ち入り禁止だわ。入れないみたい」

「なにい？　じゃあ、絵里子さんはどこにいるんだよ。」

「もしかして帰っちゃったのかな？　——いやそんなはずはないわ。」

そのとき美佳は張り紙が貼つてあるのに気がついた。

「灯台は無入化に伴い、閉鎖されています。関係者以外は立ち入りできません。海を見に来られた方には、近くの展望台の方に回られるようお願いいたします。」

「これ、こつちよ！」

灯台自体は立ち入り禁止だったが、案内の張り紙によると灯台の近くに海が見える展望台がある。わざわざ離れたところに来るのに絵里子がすぐに帰るとは思えない。絵里子がいるのだとしたら灯台の下にあるそこ以外にない。

展望台には複数のカップルがいた。どれも休日と言うことで遊びに来たカップルたちだ。あるカップルは二人で展望台のベンチに座って何かコンビニでも買ったのだろうか、菓子パンのようなものを食べ、あるカップルは手を繋いで笑顔で海を見ていた。

「ほんと私、その分野わからなくてさ〜」

「明日予定開いてる？ またどつか行こうよ。」  
周りの話し声が耳に入ってくる。暁と美佳は展望台の中を歩いていつて、周りを見渡した。美佳と暁はその中から、一人だけで海をながめている女性を見つけた。

「ほら、ギョー。」

美佳が暁をつつく。暁は無言で頷いた。暁はその女性に歩み寄った。

ザッ、ザッ、ザッ。

いつもはなんと言うことはない自分自身の足音が、暁の心拍を早くさせた。そして、その女性の前で一度立ち止まった後、声を掛けた

「絵里子……さんですか。」

その声を聞くと女性はいつしゅん笑顔で振り向いた。しかし、暁の顔を見ると女性の笑顔はすぐに消えた。暁はまず自己紹介しなければいけないだろう

と察した。

「あの……、はじめまして、私は暁と言います。……虎部暁です。」

「寅部さん……？」

「とらべと言つても、たぶんあなたが思い浮かべている漢字とは違うと思いますが。あなたは成宝絵里子さんですか？」

「はい……私は成宝絵里子です。なぜ私の名前を知ってるんですか？」

「あのー私は山武市の方でソフトウエア関係の仕事をして……、私の住んでいる住所も山武市なのですが、まあ、観光はどっちかというところと発展してないんですが、でも自然が多くていいところで、うちの近くのうどん屋なんか腰が強くてつゆは味がはつきりしててーおっと」

美佳がぐいっと暁の肩をつかんで前に出た。

「まったく、いつまでもたまたま意味のない自己紹介してんの！早く本題に入りな。」

「ああ、そうだったな。」暁は息を飲み込んだ。「ー暁一さんのことなんですがー」

「！ 暁一を知ってるんですか？ー暁一は、今、どうしてるんですか？」

絵里子は水を得た魚のように顔をパツと明るくさせると、くいつくように言った。

「もしかして、あなたがたは暁一の友人の方ですか？ー」

「あ、はい、ええ、そんなようなものです。」

「よかったあ。暁一、新しく友達ができたから紹介しようって言っていたんですよ。今日紹介してくれるんですね。肝心の暁一がまだきてなくてすみません。あ、私改めて自己紹介しますが、成宝絵里子といます。」

「あ、どうも。」

暁も挨拶した。美佳が暁の尻をギューツとつねる。

「おい、なんだよ。」

暁が声を潜めて言う。

「あんだ、何はなしめんどくさくしてんのよ。早く本題に入りなっって言ってるでしょ。」

「そちらのかたは、虎部さんの彼女のかたですか？」

絵里子が言う。すると美佳は眉間にしわを寄せて怒った。

「私がこんな奴の彼女なわけないでしょ！！！！（怒）」

「す……すみません！、すみません。」

絵里子は美佳の剣幕に驚いてあたふたした。

「わたし、今日暁一にプレゼント持ってきたんですよ。」

一段落してから絵里子が言った。

「プレゼント？」

「ええ。」

絵里子は微笑んだ。

「ほら、これですよ。」

絵里子はバッグからそのプレゼントを取り出した。

「あ！」

暁と美佳は固まった。

「いいでしょう。近くの海岸で拾ったんです。」

それは、暁が救急隊員の人から渡された貝殻と全く同じ、貝殻だった。

「なんか、かわいいでしょう。暁一、こういう海のもの、好きなんですよね。」

暁はポケットからあの貝殻をとりだした。

「えっ……？」

絵里子が驚く。美佳は息をのんだ。暁はしばらく手に取った貝殻の方を見ていたが、絵里子の方にゆっくりと目を移した。

「これ……暁一さんから預かったものです。」

「え……?」

絵里子はまじめな顔になると、聞いた。

「暁一は……、暁一は今日来るんですか!? あなたは、誰なんですか?」

「暁一さんは、暁一さんは亡くなつたんですよ。」

「えっ……!?!」

そのとき、絵里子の顔から表情が消えた。しばらく絵里子は固まっていた。しかし口を開くといきなり、

「信じません!」

ときつぱりした口調で言った。

「そんなことは信じません!あなたたち、暁一から頼まれてそんなこと言うんでしよう!?　ほんと怯弱な人。直接言いたくないからって、友達だかなんだかわからない人に嘘を言うように頼むなんて。あんなに私のことを理解してくれていたのに――、友人に嘘を言うよう頼んで私を捨てようとしてるんだわ。」

「いや……、そうじゃなくて……。違いますよ。あんた暁一さんが浮気しているんじゃないかなんて邪推してるみたいだけど、暁一さんはあなたのことを思いつづけてたんです。死ぬ間際まで。一緒にこの灯台に来たいって。」

「――!」

しばらく沈黙が流れた。

「暁一さんから預かつたんです。この貝殻を――。」

「――私が暁一と会つたのは中学の時でした。」

絵里子は暁一との出会いについて話し始めた。

――私は骨の病気で体が弱くて、内気な子でした。中学の時、私は家に帰るのが嫌で、学校の帰りはいつも家の近くの河原で時間を過ごしていました。ある日、ふと川を渡ってみようって思いついて、何でそんなこと思ったのか

わかりません。でも、その頃の私は何でかなんて考えなくて、川に入っ  
いったんです。途中魚が泳いでるのを見つけて夢中でおってるうちに、川底  
のこけの生えた石で足を滑らせて――。泳ぎは得意なはずだったんですが、  
川の流れで体が仰向けになったとたん、パニックに陥ったんです。そのまま  
水を飲みまして、意識が薄らいで流されているところに、同じ学校の――そ  
れでも最初は親しい方ではありませんでしたが――暁一が泳いで助けに来て  
くれたんです。暁一は私の顔を水の上に引き出すと、川辺まで泳いで連れて  
行ってくれました。その川は、今でもこの海に流れ込んでいる川です。その  
後、私と暁一は中学を卒業して、別れ別れになりました。

――うちの母親は引きの強い方で、しかも旧守的な封建主義者でした。なの  
でわたしのこれまでの人生の路線は良妻賢母、すべてわたしの母親に決めら  
れてきました。やりたいことがあっても、好きなことがあっても、すべて制  
限されてきました。仕事も母親が決めました。手堅いところがいいだろうっ  
て、公務員で。でも、そこで暁一さんと再会したんです。かれは写真家に  
なっていて、私は役所のキャンペーンと一緒に仕事をする機会がありまし  
た。彼はとても立派な大人になっていて。そこで昔の話をしたりして、で、  
恋人関係になったんです。より親しくなればなるほど、結婚したい気持ちは  
大きくなってきたのですが、やはり母親が了承してくれませんでした。それ  
どころか、勝手にお見合い話を持ってきて、その男と結婚しろと。わたしは  
独り立ちするにはまだ社会のことを知らなすぎるし、そのころはまだ病気が  
直りきってなくて、駆け落ちしてまで結婚することはさすがにできなかつた  
んです。

「そんな親の言うことなんて聞かなくていいのに。」  
美佳が口を挟んだ。

「ええ、でも、私には度胸がなくて――。」  
それから、絵里子はこの灯台への思い入れについて語った。

——私は今日まで一度も来たことなかったんですが、暁一の方はこの灯台をよく訪れていたらしくて、当時はここの展望台だけでなく、灯台のてっぺんの展望台にも入れたそうなんです。暁一はこの灯台から見える景色をながめるのが好きで、その話をよく私にしてくれました。彼はその景色のうち、特にカモメが海の上をさすらうのを写真に納めるのが好きで。若山牧水の「海の青 空の青にも 染まず漂ふ」の話をしたりしていました。

「——彼は少しでもいい絵を撮りたいと言っていました。でも普通の写真家と違って、何回も撮り直したりしないんです。一番いい瞬間を捕らえるにはジャストで撮らなければいけないんだと。だから彼はいつでも一眼レフのカメラを持ち歩いてました。それでもよくシャッターチャンス逃したって悔しがってました。」

絵里子は悲しげな顔をしながらもはにかむように少し笑った。しかし、すぐにまじめな顔に戻った。

「『今度君を連れて灯台に行ったらカモメと夕暮れを背景に君を撮ってあげよう』って。なのに、それきり暁一さんからは連絡も何もなくて……。その頃から友達や母親や周りの人から『暁一は他の女性とつきあってるみたいよ』とかいろいろ言われるようになって、私はてつきり本当に暁一さんの心が離れてしまったのではないかと思っただけです……」

絵里子は手の甲で目を押さえた。日は落ちかけて風が強くなり、いつの間にか周りに人はいなくなっていた。

「私を灯台に連れて行ってってくれるって言ってたのに、——何で約束を果たしてくれなかったの？ 暁一——。先に、死んじゃうなんて。」

絵里子さんはしゃくり上げた。手の甲が夕日に照らされて光る。

「暁一さんはあなたのことを思いながら死にました。」

絵里子は顔を上げて暁を見た。暁はポケットからあの貝の殻を取り出した。

「これ、暁一さんがあなたに渡してくれと、救急隊員の方に預けていたものです。暁一さんは死ぬ間際に、あなたを幸せにしてやれなくて『ごめんな』つ

て、言つてたそうです。暁一さんがあなたのことを思いながら死んだのと同じように、あなたも暁一さんのことを思っているから今日ここに来たんじゃないですか。それに、暁一さんはあなたを裏切つたりしませんよ。」

「――」

「私が言うのもなんですが――、あなたは今日ここに来た。あなたの中で暁一さんは生きていて、その暁一さんがあなたをここまで連れてきたんじゃないでしょうか。この灯台まで」

すると絵里子は声を出しながら泣き始めた。

「――わかってるんです。わかってるんです。あの人が、私を捨てたりなんてしないって――。でも、寂しかったんです。一人だけで暮らしているのが――。日々の些細なことでもいいから、話し相手が欲しくて――。」

涙が絵里子のほおを伝った。その様子をヘルメットを置きにスクーターの所に戻った美佳と、その足下でセーブがながめていた。

\*\*\*

いきなり、セーブがワンワンと鳴き始めた。遠くから複数の車が走ってくるような音がする。

「！」

絵里子がいきなり展望台の入り口の方へ走り出した。

「ちよつと、あんた、どこ行くんだよ!?!」

いきなりのことに驚きながらも暁は絵里子を追いかけた。絵里子は展望台の外に出ようと走ったが、しかしすでに遅かった。じき、絵里子は車の中から出てきたスーツを着た男達につかまつた。

「放して、放してください!」

絵里子は叫んだが、男達は聞く耳を持たず、絵里子を車の中に押し込んだ。

「こら、おまえ達なんなんだよ!」

暁が男達につかみかかる。ゴスツ。暁の腹になぐりが入った。暁も力が抜けたところで無言の男達によつて車の中に押し込まれた。

「ギョー！」

「ワン、ワン！」

美佳が暁の名を呼んだときには既に車達は発進しようとしていた。車の扉が閉められるかと思われたとき、セーブがドアの隙間から車に飛び乗った。そして車は発進した。

「な、なんなのよ、あいつら——」

美佳は少しの間呆然としていたが、すぐきつとした表情になると、

「なんかわからないけど、追いかけるなきゃ！」

スクーターにまたがり、スクーターのハンドルを回した。

車はさつき暁と美佳がスクーターで走ってきた道を抜けると、峠越えの道に入った。

「うう、寒くなってきた——」

美佳はその後をスクーターで追った。機密性のある車と違って、スクーターはもろに風を受ける。しばらく美佳のスクーターは車を追っていたが、地面に落ちていた何かを踏むといきなりスリップして道路のはじめに突っ込んだ。幸い車が少ない場所・少ない時間帯だったせいか、対向車線の車にぶつかるといふようなことはなかった。

「いつつつつつた——」

美佳は幸いたいしたケガもせずに済んだが、前方の車はそのまま走り去って行き、見失ってしまった。

\*\*\*

暁と絵里子は広い和室に座っていた。そこはほんとにだだっ広い和室で、何

部屋も連なったそれぞれの和室が、ふすまを取り外されて広い空間になっていた。時々外から鳥の鳴き声だとかが聞こえてきたが、部屋の中には暁があらをかいて座っているのと、絵里子が正座で座っているのみだった。横ではセーブが吠えたりもせず静かにしてしつぽを振っていた。

「あんだ、あの連中はいったい何なんだ。知ってるんだらう？」  
暁が絵里子に聞いた。

「あの人達は――」

そのとき、すーつとふすまが開くと、暁と絵里子の前面の奥の扉からい〇才程度だろうか、ひげを生やした男が入ってきた。その老齡の男はドスドス畳の床を歩くと、暁と絵里子の正面にドツと座った。

「おまえが寅部暁一という男か。」

いきなり男は暁に聞いた。

「……？。いいえ違います。」

「私の息子から婚約者を奪い取ろうなど、おおそれたことを考えたものだ。」

「は？」

孝義は目の前にいるのは暁一でなく全く別人の暁であるということに気づいていなかった。

「とぼけるでない。調べはもうついている。わしは絵里子さんの婚約者であるわしの息子公一の父親の孝義だ。わしは大築家の当主でもある。絵里子さんとは何回か顔を合わしているの。」

絵里子は無言で頷いた。

「今日あんな方法を使ってでも来てもらったのは、あんたに公一と絵里子との結婚について了解してもらおうと思ったからだ。」

孝義は息を吐いた。

「大体最近の若者は見識が大人に届かないうちに結婚したいだのいうんだからな。それに結婚は本人達だけのことではない。嫁、婿の両家との関係を築

く大事な儀式だ。当人達の気持ちでだけで決めていいことではない。わしは弓をやっているが、弓をやっているとつくづく思うのは昔の武士は家を守るために日々鍛錬し、弓の練習をしたと言うことだ。家のために、社会のために弓を引くのだ。大体最近の若者は乱れとる。言葉からしてなつとらん。「全然」を肯定形に使ったり、「やばい」をいい意味で使ったり、ルールを無視するような言葉遣いばかりだ。ルールに従わない世の中は、必ずダメになる。」

いきなりふすまが開いて別の男が入ってきた。今度は暁と同じくらいの年齢だ。

「おやじい。絵里子がうちにきたってほんとかよ」

「ああ、公一。部下の話によると絵里子さんと一緒にいたらしくて寅部暁一と言う男も連れてきた。」

「!？」

暁はこの男がいつしゅん怖い顔をしたのがそれとわかった。しかし、この男の顔は暁の顔を見るとすぐに落ち着きを取り戻した。そして、今度は暁が驚く番だった。この男――あの崖にいた男だ。そう、この男は大築家の次期当主で孝義の息子、そして絵里子の婚約者の公一だったのだ。

「公一、おまえまた街で遊んできたのか。大築家の次の当主となるおまえが、遊びほうけててはいかんだぞ。」

「いや、ついオモシロくってね。パチンコでかなり当てたから、それを掛けてもつと遊んだんだけど、今度はかえって失敗しちゃって。まあ、次はメシ代使って取り戻すから、心配すんなよ。」そして公一という男は暁の方を見てニヤリとすると言った。

「暁一さん、うちでまあゆつくりしてってください。」

暁は絵里子が震えながら涙をこらえているのが見えた。

「暁一さん、あんたみたいなの若造に絵里子と結婚するなどという覚悟はあるのかな」大築はパイプでたばこを吹かした。暁はもう一度絵里子の方を見た。そして、覚悟を決めた。

「途中で結婚生活を投げ出して、離婚だの何だの周りに迷惑を掛けるような——」

「結婚させてください！」

「あ？」孝義はいつしゅん固まった。

「僕と絵里子さんの結婚を認めてください！」

暁は一か八かのおおはつたりにてた。

「孝義さんは先ほど弓道のことを例に出していました。でもあれはおかしいです。弓は、古代から狩人が使ってきました。シカを捕らえるために弓を引き、オオカミから身を守るために弓をつがえるんです。家族や自分のためにこそ弓を引くんです。それに弓の的の中心ををねらう気持ちは、恋の一途さと似ています。決して家や社会のためだけに引くものではありません。——私と、弓で勝負してください。弓で、決めましょう。」

「勝負だと？」

「そう、もし僕が勝ったら、絵里子さんとの結婚を認めてください。」

「いきなり言われてもの。」

「逃げるんですか。どこの馬の骨ともわからないものに負けるのが怖いんですか。」

「ほほう、そこまで言われたらやらないわけにはいかんな、良かろう、受けてやる。ただし条件がある。」

「なんですか？」

「わしが勝ったらその犬コロ、——わしにタダで譲れ。」

暁は和弓をやるのは初めてだったが、前も言ったとおり、大学の頃アーチェ

リーサークルに入っており、弓にはある程度自身があつた。洋弓にせよ和弓にせよ矢を放つて的に当てることには変わりない。勝機はある。だいたい、和弓の道具の数は洋弓と比べればたいしたことない。扱いはそんなに難しくないだろう。何本か放てば体も和弓のクセに慣れてくれる。

「あのー、私が本気であなたと結婚したいと思つてゐるわけじゃないですからね。あの公一とか言う奴のことを見ていたら黙つてみていられなくて……。」「二人はその日は広大な大築家の建物の中で一泊することになった。家に帰ることが許されなかつたのだ。携帯も没収され、外部と通信する方法もなかつた。二人は夜廊下で会い、暁が絵里子に声をかけた。

「——わかつています。」

そう絵里子はいうと突然くすつと笑つた。

「あなたも、やさしい人ですね。なんか、暁一とどこか似てるような——」

「えつ、そうなんですか……。？ いや、ほんと何も気持ちがある訳じゃないですからね。あの、俺はただ、あなたにもっと実感を持つて人生を生きてもらいたいなつておもつて……。」「暁はなんともなしにあわてた。

「——俺も人のこと言えるタチじゃないですけど。勝負に勝つて、その見本を見せたいんです。」

絵里子はそんな暁のことを見ていたが、こんな話をはじめた。

「私の父は天文学者だつたんですが、その父が私と一緒に夜空を見上げながらよく言っていました——。『古今東西月は俳句などあらゆるものに詠まれてきた。それだけ月は風流だ。月は人々の生活に潤いを与えている。月は太陽の光を反射して、太陽の存在を太陽の見えない夜の間も伝えている。また、月は明るい。月が出ているのとでていないのでは電灯のないところでは全く違う。それこそ月明かりと言つて一見暗闇のような周りをうつすらと照らし出すんだ。月は森の中で迷つたときに、方向の手がかりにもなる。——また、月には模様がある。これも、まったく人々にこの模様はなんだろうと

か、いろいろ考えさせるためにあるってことさ。』」

絵里子は一呼吸置くと、話を続けた。

「——今は曉一はもういません。でも、わたしは曉一の残した光のおかげで、今は光つています。もう曉一がこの世にいらなくても、月が太陽の存在を示すように、誰かの心に、どこかしらにその存在を確かに残して、曉一の思いを伝えていきたいんです。」

曉は一瞬無言になった。しかし、聞いてみた。

「曉一さんの思いつてなんなんですか。」

「それは——」

「——あらあら！お二人さんこんばんは。」

いきなり横から廊下を歩いてきた妙齢の女性が声を掛けてきた。

「空子さん。」 絵里子はその人の名を呼んだ。

「あの一、失礼ながら誰ですか？」

曉が質問する。それを聞くとその妙齢の女性は絵里子と曉の方をそれぞれ向いて、お辞儀しながら答えた。

「絵里子さん、お久しぶりです。そして曉一さんでしたっけ？ はじめまして。私は孝義の妻の空子と申します。」

「孝義さんの奥さんですか」

「はい。今回は孝義がご迷惑をおかけして申し訳ありません。どうもあれは頑固じじいで、家を守れたの妻は夫に従えだの、古くさくていけませんねえ。ま、人にはあんなこと言っても、実際の妻であるあたしに向かつてあんな生意気なこと、言えるわけがないですけどねえ。」

オホホ。空子は口に手を当てて笑った。

「曉一さん、明日の弓勝負、勝って絵里子さんを自由にしてやってください。今日はいろいろあつて大変だったでしょうから、二人とも、ゆつくり休んでくださいね。では。」

そう言い残すと空子は廊下の闇の中に消えていった。しばらく絵里子はそれ

を見届けていたが暁の方を振り返ると、口を開いた。

「暁一の願いとは、海をきれいにすることなんです。――こここのあたりの海は、結構汚れているんですよ。」

「海をきれいに？」

暁一は小さい頃家族と一緒に海水浴場に遊びに行つたときに、溺れたことがあつた。それをライフセーバーの人が助けたのだ。絵里子が川で溺れたときに助けたのは、ライフセーバーの人から受けた恩を返すためでもあつた。暁一は絵里子を助けた後、絵里子と一緒にその海水浴場にライフセーバーの人を訪ねたことがあつた。

「すげえだろ兄ちゃん。俺も溺れてる人を助けたんだぜ！ ほら。」

暁一は絵里子の肩をポンポンとたたいた。絵里子にはにかみ笑いをすると自己紹介した。

「あの、は、はじめまして。絵里子と言います。どうも、はじめまして。」

「はじめまして。絵里子ちゃん。それにしても暁一が人を助けたなんてなあ。偉い偉い。」

そのライフセーバーの兄ちゃんはまだ小さい暁一の頭をクシヤクシヤツとなでた。

「あー！ほんとだと思つてないだろ。俺ほんとに溺れてる人助けたんだから。」

「おーい、そつちはどうだ。どんくらいゴミ集まつたか？」

遠くからビニール袋を持っている人から声が聞こえる。手に持った袋に入っているのは、砂浜に落ちているゴミだ。

「こつちも結構たまつてる！」

ライフセーバーの兄ちゃんが持っている袋には、たくさんのゴミが入っていた。

「すげえ、こんな量のゴミどこにあつたんだ？」

暁一が聞いた。

「砂浜にね、落ちてるんだよ。砂浜に遊びに来た人が落としたり、海から波に運ばれてはるばるやってくるものもあるんだ。こういったゴミを集めるのも、ライフセーバーの仕事さ。海で商売してるんだから、海はきれいに保たないとね。」

「ふーん。」

暁一はしばらくゴミを見ていたが

「俺も手伝う！」

そういつてビニール袋をひったくった。

「お、うれしいねえ。」

ライフセーバーの兄ちゃんは片笑んだ。

「ここらの海も、ゴミだけじゃなくて汚い川からの水があるから、そう簡単にはきれいにならないんだよな。工場からの廃液もそうだし、家庭排水もそうだし、今度は上流の近くにゴルフ場ができるなんて言うからなあ。——俺は小さい頃から遊び場になつてくれたこの海を守りたいんだ。でも、そう思い通りにもなかなか行かない。難しいことなんだよ。」

ライフセーバーの兄ちゃんは寂しそうな笑いを顔に浮かべた。

「暁一、おまえが大人になつたら、海をきれいにしてくれよ。——」

「暁一は海を豊かにするために、写真集を売って得たお金を使つて、植林をしようとしていました。山が豊かになると、海もきれいになるんです。海をきれいにする。それが暁一の水の中写真家としての願いです。——」



次の日も風が強い日だった。しかし昨日の陽気はなく、空には暗雲が立ちこ

めていた。暁と絵里子は大築家の中の弓道場に来ていた。

「これを使え。」

暁は孝義から弓と矢を渡された。暁は弓の弦を軽く引いて感触を確かめた。

「ルールは簡単。それぞれ三回ずつ矢を放ち、三本のうちすこしでも中央に近い矢を放ったものを勝ちとする！——」

「よつと。」

美佳はジャンプした後地面に降り立った。美佳は大築家に潜入していた。なぜ大築家に暁と絵里子がいるとわかったかと言えば、セーブの首にGPSがついていたからだ。セーブは放浪癖があるので美佳が心配していつも首にGPSを付けていたのだ。おかげで暁と絵里子が連れ去られた場所は美佳はわかっていた。大築家の屋敷は屋敷という名にふさわしく、土地は広いし、正統派の日本風屋敷である。美佳ははしごを持ち出して、塀の屋根を越えて大築家の敷地内に入っていた。

そして勝負が始まった。

「わしはもう老人だからハンデを付けてもらおう。わしの方は的が近くしてある。」

（近っ！）孝義の的はとても近かった。

孝義は心の中でほくそ笑んだ。

（ふん、奴に渡した矢は軽くなるように細工してある。この風の中、矢が軽いのは致命的だ。わしの勝利は間違いない。）

「では、まずわしから行くぞ」

孝義が弓をたて、矢をつがえる。そして頭の方から振りかぶったようにして弓を引いた。弓の弦が孝義のほおに触る。暁はその様子を横から観察していた。しばらく間があった後、

「シュツ」

孝義の手から矢は放たれると、「バンツ」。的の周辺にあたった。

「くっ、風で曲がったか。」

（美佳…アブない、あたるところだった……。）

矢は的の陰に隠れていた美佳に当たりそうになった。しかしもちろん勝負をしている二人はそんなこと知るはずもない。

次に暁が見よう見まねで矢を放った。バンツ。矢は孝義より中心に当たった。

「よしっ……」

「ふん。」

（それにしてもあの矢で当てるとは……？ こいつ……）孝義は心の中でうなづいた。

今度は孝義の番。

「ヒュツ」

バンツ。

的の中心から二番目にあたった。

「ハツハツハ。どうだ、にわか弓道者とは実力が違うわ！」

暁は前に歩みでて、弓を引く。

「シュツ」

バンツ

今度は的には当たらず、後ろの畳にあたった。

（美佳…うわあ、もつと危なかった……。）

孝義が最後の弓を引く。ヒュツ、バン。今度は先ほどよりは外側にあたった。

これまででは孝義が放った矢の方が中心に近くあたった。

勝つためには、絵里子を自由にするためには、中心に当てなければいけない。

「なんだ、そんなものか。そんな程度で人を救おうなどと考えているのか？」  
孝義がけしかけた。

（そうだ、俺は今まで誰も救って来れてない。）  
暁は焦った。

暁は家族を失っていた。中学生の頃に自動車事故にあつたのだ。その車には暁の家族がみな乗っていた。たまの外出に行く途中だったのだ。事故の原因は相手の車の携帯電話による不注意。相手の車が中央分離帯を乗り越え、暁達の車にぶつかった。そして、家族はみんな死に、暁だけが生き残った。

「くそっ、どうすれば当たるんだよ。」

そのとき、暁の頭にある言葉が浮かんできた。

——残心ざんしん——

暁は弓を引きながら昔を思い出していた。

暁は大学の時アーチェリーサークルに入っていた。残心とは、そこで先輩に教わった言葉だ。暁は入学したての頃、サークルでなかなかいい矢を放つことができなかつた。放つても放つても矢は的に当たらず、暁は悩んでいた。そんなある日、その先輩から教わつたのだ。

「暁。おまえ、矢を放つた後、ああ放てたとか思つて安心してゐるんじゃないのか。」

暁が矢を放っていると、近くの水色のプラスチック製のベンチに座っていた先輩が話しかけてきた。

「え、いけないんすか？」

暁はいきなり言われて驚いた。

「弓には残心という言葉があつてな。これは弓を放つときの心構えを説いた言葉だ。弓を放つた瞬間、たいていの人は『ああ、終わった』つていう風に

ホツとする。だけど残心のある人は、弓を引いて、矢を放った後も、矢が的に当たるまで集中を切らさない。矢が的に当たるまで矢の飛ぶ先を追い続けるんだ。それが、弓を放つコツさ」

それ以来、暁の矢は確実に的の中心に近づいていった。その言葉を教えてくれたその先輩は大会に出る前肩を痛めて、その大会に出場することはできなかった。そして無念を残したまま、そのまま卒業していった。

暁は目を開いた。――残心――。今度こそ、人を救うんだ。あの言葉を教えてくれた先輩の恩に報いるためにも――。

そのときなぜか風がやんだ。そして雲が切れ太陽の光が的を照らした。今だ。暁は少し息を吸って止めると、――矢を放った。

ヒュツ。

矢が弓を離れる。矢は山を描いて飛ぶと、的に吸い込まれた。暁の目にはまるでスローモーションのようにその軌跡が描かれた。

バンツ。

「……やつ、やった！」

絵里子が叫んだ。

「――。」

暁はゆっくりと弓をおろした。

太陽の光は、確かに的の真ん中に当たっていた矢を照らしていた。

「これで、いいよな……。」

暁が振り返ると、絵里子はしばらく目を潤ませていたが、感極まって涙をぬぐった。

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

「——ギョー！やったじゃん、ギョー！」

勝負を陰から見ていた美佳も駆け寄つてくると抱きついてきた。

「おい！ 美佳おまえどこから出てきたんだよ」

「何よお、その態度。あんた達を救い出しにきたんじゃない。」

その様子を孝義はながめていたが、顔を真つ赤にすると、いきなり怒り出した。

「この勝負はなしじゃ！」

！

皆孝義の方を振り返った。孝義は暁の方を指さしながらわめいた。

「そもそもわしはその若造が弓で勝負したいとけしかけたからついでこの勝負を受けてしまったんだ。でも、今考えてみると弓の勝負なんぞで息子の婚約を解消したりなんかできるわけない！ この勝負は取り返した。」

「そうだそうだ。僕から絵里子を奪おうなんて、不当だ！」

公一も援護をした。

「そんなあ！？ ギョーは絵里子さんの不当な婚約を解消するためここまで頑張ったんじゃない！ それを今更取り消すなんて。」

美佳は憤った。しかし孝義はなお喚いた

「そもそも勝負の条件が違う！ その若造用に軽い矢を選んだのにそれでもわしが負けるなんて天候のせいとしか考えられんじゃないか！」

あ——、孝義は手で口をふさいだ。

「軽い矢を選んだですって！！？？？ ただでさえあんたの的はあの人のより近かったのに、相手用に軽い矢を渡したですって！！？？？」

横で孝義の言を聞いていた空子が怒りだした。

「いや、それは、なあ、それはなんだ。それは」

「あの相手の方に弓の心を説いたのは、家のために身を捧げるとか何とか武士の心意気だとか何とかそれを論ずるために言ったんじゃないの!? それを相手に不利な状況で勝負をしておきながら『不正』までやるなんて——」

「私も孝義の考えには納得できないな。」

勝負を観戦していた孝義の友人も空子の考えに同意した。

「結婚について説いたのは、結婚する二人がお互いに愛情を持つ覚悟を保つていけるか説いたんだろう? それをその説いた人が見苦しく約束の破棄をするなんて、いけない。それに、お昔のおまえこそ家の掟に縛られるのをいやがってたじゃないか。——」

孝義は大築家の長男。子供の頃から将来家の当主になることが決まっていた。大築家は名家でいろんな人が家の維持に関わり、その多数の人から将来を囑望されていた孝義は、自分の好きなように生きることが許されなかった。

「兄ちゃん。ベーゴマしようよ!」

時々弟たちは孝義を遊びに誘った。その時孝義は高校生で、縁側に腰掛けてボーツと空を見つめていた。

「ベーゴマかあ。俺コマなんて持ってないけど。」

「コマは貸してあげるよ。」弟はコマを孝義に見せた。

「そうかあ、じゃあ、入れさせてもらおうかな」

孝義は微笑んで了承した。しかし、孝義が縁側の庭石に置いてあるスリッパを履こうとすると、廊下を歩いてきた孝義の母親がそれを注意した。

「孝義!遊んでるくらいなら勉強しなさい。今度の試験、落としたら成績的に後がないのよ! 大築家の当主になろうものが、名門大学に入れなくてどうするんですか!？」

孝義は笑顔を消した。「――。はいはい。」

孝義はため息をついて自分の部屋に引っ込んだ。

「なんだよ、せつかく兄ちゃんさそつたのに……。」

孝義は弟たちがそれぞれ好きな将来を夢見ているのを見て、いつもため息をついていた。孝義は高校の頃親に内緒で美術部に入った。美術館で見て好きだった油絵を自分でも描きたかったのだ。しかしすぐに親にばれ、こつぴどくしかられた。おまえは絵なんかで食っていけると思ってるのか、この大築家の当主となるものがやくぎな進路をとつてはいけない、と。結局孝義は美術部を退部した。そしてきつきの友人にこぼしたのだ。おれが弟として生まれたなら、もつと自由に生きられたのに、と。

「おまえは自分と同じことを他人にも押しつけるのかい？　しがらみの連鎖を断つのが今じゃないのか？」

友人は言った。

「あんた、もしここで引かないというのならこれから飯ヌキですからね。洗い物も洗濯物も自分でやってくださいよ。」

空子も追い打ちを掛ける。

「えーっ？それは困る。」

孝義は「はあ」、とため息をつく、と、暁の方をもう一度向いて目をつぶって言った。

「わかった。公一と絵里子さんの婚約は解消だ。暁一さん、あんたの弓、見事だった。正直ここまでやるとは驚いた。まさにあれはとぎすまされた矢だった。あんたのような人と一緒になれる人はきつと幸せになれるじやろ。」

すると空子がクスクス笑い出した。

「あんた、あんたが弓の勝負をした相手は暁一って人じゃないですよ。全く

別の暁って人です。絵里子さんと一緒に灯台にいたからって間違えたらしいですけど、最後くらい、ちゃんとわかって言ったださい。」

「え？」

孝義はぽかんと口を開けた。

三人は弓の勝負の後、暁一の墓を訪れた。悦子さんに墓の場所を教えてもらったのだ。悦子さんは一人になったということ、今住んでいる家売り払う決心をし、引越し業者を呼んで今荷物の運び出しをしている最中だ。悦子さんは業者とのやりとりで後から行くと言うことで、まず三人だけで暁一の墓に向かった。

墓があるのは暁一の実家の近くの寺だった。墓には「寅部家代々之墓」とだけ書いてある。

「ここ……か。暁一さんの墓は」

美佳が線香を手向ける。暁がひしゃくで墓に上から水をかけた。絵里子は目を閉じて手を合わせる。二人もそれに習って手を合わせた。そのとき、墓場の道をバケツを持った人が歩いてきた。悦子さんだ。

「あ、悦子さん。こちらが暁一さんの恋人だった、絵里子さんです。」  
暁は絵里子を紹介した。

「はじめまして、成宝絵里子です。」  
絵里子はいつかのように頭を下げた。

「こちらこそ。もうあの世に行った後ではありますけれども、暁一も新しい知り合いができて、うれしく思っていることと思います。」

悦子は空を見上げて微笑んだ。

「そうそう。先ほど荷物を整理していたら、暁一のあなた宛の手紙が見つかりまして、まだ切手が貼ってなかったんですけど、読みますか？」

「はい、読みます！」

三人が悦子さんの家（暁一の実家）を訪れると、ちょうど引越し業者がリサイクル業者に、古紙を渡しているところだった。古紙というのは暁一が使った様々な書類だ。悦子さんは山陰を玄関まで入れると、置いておいた暁一の手紙を探した。

「最後の手紙、どんなことが書いてあるんだろ。」美佳がわくわくしながら言った。

「ええつと、確かここにテープでしばった紙の山を置いてて、その上に乗つけてたはずなんですけど、どこ行ったかしら。」

悦子さんが老眼鏡を外して探していると、それを聞いた引越し業者の人が外から呼びかけた。

「お客さん。その紙の山ならリサイクル業者に渡しましたよー。」  
そしてその後ろの家が面している道路で、リサイクル業者のトラックが走り出した。

「ちよつと、まって、まってー！」

絵里子が家の外にとび出して走っていく車に呼びかけた。ブロロロロ……。しかしトラックの人には聞こえない。

絵里子さんは全速で走り出した。

「絵里子さん！」

美佳と暁も家から飛び出す。

絵里子は叫びながら走った。

「暁一ー！の手紙ー！！！暁一ー！」

「美佳、これで追いかけんぞ」

暁が指さした。スクーターだ。

「悪い、ギョー。あたし絵里子さん乗せるから、あんた後から追いかけ

て！」

そういうと美佳はスクーターに乗って発進した。

「おい、俺はどうやって追いかけりゃいいんだよ！」  
すると玄関から顔を出した悦子さんが言った。

「電話、借ります？ タクシー呼びますよ」

そうか、タクシーか。

「すみません、せっかくですけど俺、携帯持つてるんで、それ使います。」

「タクシー、タクシーっと。」 暁は携帯のボタンを素早く押した。「もしもしー？そちら縄文タクシーですか？ 一台お願いしたいんですけど……」

絵里子はすぐにばててしまった。しかし後から追いついてきた美佳がすぐにスクーターに乗せ、二人は走っていった。そして道路が空いていたせいで意外に速かったトラックを、海辺が見える道路で捕捉した。

「さあ、行くわよ！」

美佳はあつてはならない速度で追い越しして、トラックの人が乗っているとこの横についた。幸い窓が開いていた。

「すみませーん。止まってください！」

「どうかしたんですかー！」

トラックの運転手が答える。

「そのトラックに大事な荷物が混じってんですよ。それを取り出したいので止まってください！」

トラックはトラックの中から手紙を探し出す手間は並大抵のことではなかった。三人はヒイヒイやってやっと目的の手紙を見つけ出した。そして、海辺を前にして、絵里子は手紙の封を開けた。

絵里子へ

この前は手紙ありがとう。

絵里子はいろいろと趣味を増やしてるみたいだね。そのうち俺もおまえが趣味にせい出ししてるところを見に行くから、それまでに頑張つて俺が思いもつかないようなことができるようになって俺を驚かせてくれ。

植林活動の方だけど、今度募金が集まって苗木を手に入れたから、上矢山に植林するめどがやつとついた。こんどおまえも一緒に来てくれよ。仲間のみんなも待つてるから。

そのうちもつと頻繁に会つて話せるようになったらいいけど、今はしょうがないかな。

最後に大事な言葉を一つ——書こうと思つたんだけど、こういうことは直接言つた方がいいから、また今度会えるときにするね。

曉一

###

「大事なことつて……？」美佳が言った。

「結局最後まで謎が残つちやつたな。」暁が呟く。

「もう、何でこんな大事なときに、ちゃんと書かないのよ——」絵里子は手で涙をぬぐつた。

「ほんと、大事な言葉つてなによ——。」

その後、絵里子と公一の婚約話は取り消しになった。

また、暁一の死についてあらたな事実が明らかになった。あのアイス売りのじいさんの奥さんが、暁一が砂浜で倒れていたであろう時間に、それが見えるはずの位置に公一が立っていた所を目撃していたのだ。その奥さん自身からは暁一は見えなかったため、暁一の存在にその人は気づかなかつたが、公一がなぜ暁一をすぐに助けなかったかが問題となった。まえ暁と美佳が暁一が死んだ崖の現場に行つたときに遠くで見えた男は、公一だったのだ。そして、警察に引つ張られた公一は、すべてを洗いざらい話した。

その話によると、別に公一が暁一を殺したわけではないらしい。しかし、危険だと知っていた崖に暁一を呼び出して、貝の殻を拾うことを提案して砂浜に降りさせ、自然と足を滑らせるように誘導したのは公一だったのだ。そして、暁一が思惑通りケガをすると、それを崖の上から眺めながら、しばらく放置した。そして暁一が虫の息になったことを確認して、第一発見者として救急に連絡したのだった。

今回の出来事の後、暁の生活に対する積極性が増した。

「よう、金井！今日もいい天気だな。昼休み一緒に運動場でフットボールしねえか？」

「ああ、いいけど……、珍しいな、おまえから誘うなんて。おまえ毒キノコでも食つたのか？」

暁の会社での表情は前と比べて格段に明るくなった。声も大きく話すようになり、同僚達はそんな暁を訝しがった。中には「彼女ができた」とか「宝くじが当たつたらしい」とかどこからともなく変な噂まで立つようになった。

「暁、今日という今日は飲み会出席してもらおうぞ」

課長がまた、業務命令を振りかざすと、

「ああ、今日は顔出しますよ。ついでにカラオケも歌わせてもらいます。」

「……、ほんとに毒キノコ食ったか。悪いが、今日は飲み会だけでカラオケはないがな。」

「おっしいなあ、『津軽海峡冬景色』、おまえにも聴いて欲しかったなあ。」

金井が悔しがる。

「……いや、それはいい。」

「ほんと、どうしたのかしらねえ」

暁は近所の人や仕事の仲間など周りの人とも積極的に関わるようになり、仕事にも打ち込み、周囲からは驚かれた。

「なんでそんなにやる気が出るようになったわけ？」

言葉には出さないものの暁の中ではこんな考えがまとまってきた。

（写真がジャストで撮らなければいけないように、ソフトウェア開発も使いやすさにジャストしなければいけないんだ。求めるべきは使いやすさそのものであって、どんな方法やインタフェースを使うか制限することじゃない。」

「ギョー！絵里子さんから荷物が届いたよ！」

後日、絵里子から暁の所に宅配便が届いた。今度は宛先に正確に暁の名前が記されていた。そしてその荷物はまたしても開封されていた。その荷物には、感謝の念が書かれた手紙とともにシュークリームが入っていた。もちろんシュークリームのうち一部は美佳によって食べられていたのだが。

「やつとあんたにも春が来たのかな？」

美佳がシュークリームで頬をふくらませながら言った。

「いや、俺には真似できないよ。暁一さんみたいに死に際にあんなに人のことを思うなんて。」

暁は絵里子からの手紙を手にとった。そしてその中から写真を撮りだして、口をあぐりと開けた。

「なんだこりゃ！」

「ああ、そうそう。絵里子さんエレキギターはじめたんだってさ。大学の後輩とバンド組んで。」

写真にはノリノリでエレキを弾く絵里子の姿が写っていた。

「ええ？ ちよつと意外だな。」

「それがCDまで出して結構売れてるんだって。ほら、私買ってみただけど。」

美佳は背中からCDを取り出した。

「おいまだ音楽はじめたばっかなんだろ？ もうCD売ってんのか？ てか、もうそのCD買ってんのかよ。聞いてねえよ。」

そして、ふうと息をつくとき、暁は言った。

「俺も、なんか頑張ってみっかな。」

「あんたが頑張ろうなんていうなんて、今日はこれから台風が来るかな。」

「心配いらぬ。『今日と明日は日本全国は高気圧に覆われるでしょう』」

美佳はぽかんとした顔をした。

「ん、なんだよ。俺の顔になんかついてるか？」

「い、いや、なんでもないよ。」

暁は外に広がる青空をながめていた。その日は、外には陽気に満ちあふれていて、人々は笑顔を交わしながら道を歩いていた。ほんとの夏も、もうすぐだ。そして美佳はそんな暁を見て「ギョーの心にもようやく春がやってきたのかな」とフツとわらうのだった。 ■ (完)

###

(c) whitecaps 2007 All Rights Reserved.